

下級兵士がみた植民地戦争 —台湾における「生蕃討伐」と加藤洞源—

後藤乾一編・解題[†]

Colonial War in the Eyes of a Lower-ranking Soldier: “Pacification of Barbarians” in Taiwan and Kato Togen

Ken'ichi Goto

Japan obtained Taiwan as her first colony at the Shimonoseki Treaty(1895) after the Sino-Japanese War. But it took a long time to establish full-control over the land due to the furious resistances on the part of Taiwanese as well as other “aborigines” in mountain areas. The Japanese military and police forces in Taiwan conducted thorough suppression against these resistances. Especially, military suppression of the “aborigines” who were oppressed under the deployment of “5 year plan of acculturation and pacification of barbarians” (Riban-Seisaku, 1910-14) carried out by the 5th governor-general Sakuma Samata was widely known for its harshness.

Today, the Yasukuni shrine has a list of war-dead who lost their lives in the “incidents and wars” and were enshrined as “god” since the early Meiji period. According to this list, 1130 soldiers were dead in the “Taiwan Campaign” mainly under the Riban-Seisaku.

Regarding the previous studies on colonization in Taiwan, a number of excellent works have been done on and about this oppressive period, both in Taiwan and Japan. In reality, however, not accurate record has been left by Japanese soldiers who actually were involved in the Campaign. Considering this, the introduction of a personal memoire written by a lower-ranking army soldier Kato Togen (1891-1952), who later became a resident-priest at well-known Hoon-ji of Ayase in Kanagawa prefecture, has a rare and great value in order to understand actual situations of the Riban-Seisaku.

はじめに

日清戦争(1894~95)終結後の下関条約によって日本は清国から最初の海外植民地として台湾を獲得したものの、その「平定」において予期した以上の長期にわたる激しい抵抗に直面した。「領台」初期におけるその人的・物的被害の甚大さが、漢民族系、先住民系(当初日本側は蕃人、生蕃等と呼称、1994年以降の台湾では原住民が公式呼称)を問わず彼らの抵抗運動に対する峻烈な平定作戦の背景にあった。領台以降、後述の「理蕃政策」が完了したとされる1915年までの約20年間を台湾における植民地戦争(期)と位置づけることが一般的である¹。

従来、先住民に対する軍事的鎮圧の徹底性、暴虐性については(1930年の最大の抗日蜂起「霧社事

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授



写真1 青年僧時代の加藤洞源 (1891-1952)
(神奈川県綾瀬市 早川義行氏所蔵)

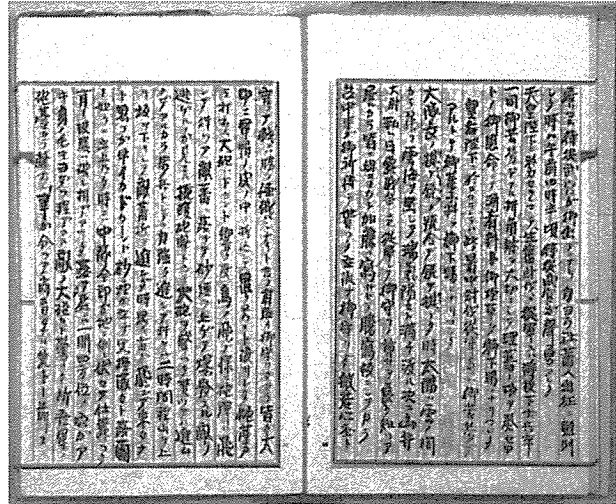


写真2 『廿七世生ひ立ちより』の一部

件」を含め)、日本側・台湾側の各種文献においてしばしば言及されてきた²。しかしながら、その「討伐作戦」に実際に従軍した日本の下級兵士による克明な記録は、管見の限り今までほとんど存在しなかった。そうした中で、本稿で紹介する加藤洞源の「廿七世生ひ立ちより」の中で綴られた従軍記録はきわめて衝撃的で、台湾における植民地化研究を深める上からも重要な意味を有するものと思われる。

この記録は本来『綾瀬市史3 資料編 近代』(1995年 神奈川県綾瀬市編)に収録された地方文書のひとつであり、同市史編纂委員会の中心メンバーである日本近代史家 大畑哲氏(元県立厚木高等学校教員)の丹念な調査の結果、地元報恩寺に保存されていたことが判明したものである。このように既刊ではあるものの、「市史」という流通範囲が極めて限定的な媒体に発表されたこともあり、この重要な記録が台湾植民地期研究の中で活用されることはなかった。大畑哲氏からの紹介で本記録を一読した筆者は、その史料価値の重要性に驚くとともに、しばしば“鳥肌が立つ”ほどの凄惨な「討伐」実態を垣間見、それを日本植民地期台湾なかんづく原住民社会(史)の研究に関心を有するより広範な人々に知っていただく必要があるとの判断から、あえてひとたび活字化された本史料をここに復刻させていただく次第である。

加藤洞源(1891~1952年)は法名で、本名は加藤新一、愛知県丹羽郡岩倉町(現岩倉市)曾野の出身である³。10歳で僧門に入り、翌年郷里の龍潭寺で得度する。1912年(大正元年)、徴兵で台湾歩兵第一連隊に現役兵として入隊し、佐久間左馬太総督(在任1906~15年、海軍大将)が「理蕃事業」の名のもとに遂行していた山地先住民=「生蕃」の「討伐作戦」に2年間にわたり従事する。その時の生々しい体験を赤裸々な筆致で綴った記録が本史料である。なお洞源は、1920(大正9)年、宗門の推挙で神奈

川島高座郡綾瀬村寺尾の曹洞宗の古刹報恩寺（開山、1602年）の第27世住職となった。そして洞源は、この記録を往時のメモや覚書きをもとに、死去する1年ほど前から書き綴り、その存在は没後長男である同寺28世加藤良興によって確認されたものである⁴。記録からも明らかであるが、「生蕃討伐」に従軍中の悲惨な体験から洞源は観音信仰に目覚め、住職就任後は報恩寺境内を観音信仰の霊場とする各種事業に精力的に取り組んだ。ここではその点については立ち入って触れないが、『綾瀬市史4 資料編現代』には、洞源記録の続編として「大東亜戦争」期の報恩寺には弾除け観音、お助け観音として出征兵士のため多数の関係家族等が訪れたこと、また敗戦後GHQの将校、兵士が洞源の法話に耳を傾けたことなどが記述されている⁵。

一 「生蕃」をみる視線

人種的、文明的に優位にあると自認する立場から、劣位にあるとみなした人々を「見物」という慣わしはいつごろから始まったのであろうか。こうした「劣等」人種、民族を展示の対象とする営為と19世紀後半のヨーロッパにおける社会進化論の隆盛とは、いうまでもなく不可分な関係にある。その嚆矢は、文化人類学者や歴史学者によってしばしば言及されるように、1889年5月フランス革命100周年記念行事としてパリで開かれた万国博覧会に求めることができる。エッフェル塔の完成や最新の産業文明の諸成果が訪れた3200万余の人々を驚嘆させた一方、その会場の一角にはフランスの諸植民地から連れてこられた生身の人間が入場者の好奇に満ちた視線にさらされた。

“花の都”パリでの「人間動物園」はその後のヨーロッパの万博の雛形となったが、そのモデルは20世紀初頭の日本にも移植されることとなった。1902年1月、日本は当時の最強国イギリスと日英同盟協約を締結し、世論はこれを「名実ともに世界強国の列に入りたるを思へば、或は恍然夢のごとき感なきに非ずといえども、夢か夢にあらず…」(『時事新報』1902年2月14日)と歓呼のうちに迎えた。そしてその翌年3月、大阪で開かれた第五回内国勸業博覧会の会場の一角に「学術人類館」なる見せ物小屋が設けられた。その趣旨は、「内地に近き異人種を集め」その風俗習慣を「学術的」に紹介するべく、「北海道アイヌ五名、台湾生蕃四名、琉球二名、朝鮮二名、印度三名、爪哇一名、バルガリー〔南インド・タミール系の少数民族と思われる—後藤〕一名、都合二十一名の男女」が、一等国の隊伍に加わった日本人の好奇の対象として展示された⁶。当時の『大阪朝日新聞』(1903年3月1日)は、こう寸描する。

「(彼らは)各其国の住所に模したる一定の区画内に団樂しつゝ、日常に起居動作を見すにあり亦場内別に舞台如きものを設け其処にて替はる々自国の歌舞音曲を演奏せしむる由にて観客入場の口は表にありて出口は裏にあり通券は普通十銭、特等三十銭にして特等には土人らの写真及び別席にて薄茶を呈すとの事」

この学術人類館からは、近隣アジアに向けられる近代日本の視線を特徴的に汲み取ることができるが、それは以下のように約言できよう。

第一は、「琉球処分」(1879年)あるいは「旧土人保護法」(1899年)により日本内地に統合したはずの琉球(沖縄)住民、アイヌを「異人種」と認識し、劣等視するまなざしである。このことは、逆に言えば、当時の日本人は自国を単一民族国家という虚構としてみるのではなく、異民族を包摂した「多民族

国家」]として暗黙裡に認識していたことを示唆するものでもあった。

第二は、台湾、朝鮮、中国とすでに日本が植民地化したり対外的膨張の対象とした地域—しかも朝鮮、中国の場合はかつての儒教文化圏の先進地域—が明白な優越感の対象となっていたことである。

第三は、こうした優劣関係が列強の植民地に組み込まれていたジャワ、インド等南方アジアにも同心円的に拡大されていたことである。単純化を恐れずにいえば40年後の「大東亜共栄圏」の秩序意識が、ここにはすでに明確に看取できる。

第四は、合計21名のうち半数近くに当たる9名がアイヌおよび台湾の先住民族によって占められていることである。勸農定住化の促進による撫育を目指した対アイヌ施策が植民地化以降の台湾の山地諸民族に踏襲されつつあった経緯を考慮する時、この両者が絶対人口数の少なさにもかかわらず過半近くを占めていたことは決して偶然ではないだろう。

そして第五は—この点は上記記事の中では明示的には指摘されていないが—アジア域内における差別の重層性ということである。その意味で真栄平房昭が紹介した『琉球新報』(1903年4月11日)の次の記事は、「弱者」間の断層の深さをみる上できわめて示唆的である。「台湾の生蕃・北海道のアイヌ等と共に本島人を撰みたるは、是れ我を生蕃アイヌ視したるものなり。我に対するの侮辱豈にこれより大なるものあらんや」⁷

このように概観してみると、20世紀初頭の帝国日本の確立期において内地(本土)→内国植民地→植民地、といわば「差別の移譲」の論理を見出すことが可能である。本稿が対象とする当時「生蕃」と呼称された台湾先住民族に対する「討伐」、「理蕃事業」は、その概念そのものに含まれる「文明論」的な価値観とともに、それを産んだ近代日本の「オリエンタリズム」的なアジア認識と不即不離の関係をもって展開されたものであった。

二 「理蕃事業」の展開

前述した内国勸業博覧会での「展示」が示すように、文明的に劣る存在として「生蕃」が日本社会に可視化されるようになった時期、現地台湾における日本側統治者は、どのような「生蕃」施策を構想し、準備していたのであろうか。

日清戦争終結直後の1895年10月31日、日本は日令26号「官有林野及樟脳製造取締規則」を発布するが、その第一条において「無主地=官有地」の原則が提示され、爾後先住民族の居住地域を「合法的」に収奪する法的根拠となった⁸。こうした新たな統治者による一方的な生活「圏」・生活「権」への浸潤が、先住民による抗日抵抗運動の激化の引き金となったことはいままでのまなかった。

「領台」初期から日本側当局を悩ませた先住民の武力抵抗に対し、第四代総督児玉源太郎(在任、1898~1906年、陸軍大将)は、その「対蕃方針」においてこう断じた。「蕃界ニ棲息スル蕃人ハ頑蠢馭シ難ク野生禽獸ニ齊シ…宜シク速ニ鋭意シテ前途ノ障碍ヲ絶滅セシムルコトヲ期スヘキナリ」⁹。このように領台初期から「野蛮」な先住民の抵抗に苦慮していた日本側であったが、当初はそれ以上に漢族系住民の執拗な抵抗が除去すべき主対象であった。日清戦争終結から1915年の「理蕃事業」終了までの20年間を植民地戦争(期)という概念で理解する大江志乃夫は、この期間を三期に区分し、漢族系住民のゲ

リラの抵抗が一段落ついた1902年から15年までを「山地住民の軍事的制圧」期と捉えている¹⁰。他方、「討伐」期の開始と終結をより長く1896～1920年の時間軸で捉える傅琪貽は、この時期官側統計による「蕃社討伐及警備線前進方面状況年代表」だけでも152回に達する征服戦争が展開されたと指摘する¹¹。

こうした一連の対先住民施策が、より具体的な形で集大成されたのが児玉源太郎の後任佐久間左馬太総督の下で1910（明治43）年から五年間にわたり実施された「五箇年計画理蕃事業」である。いうまでもなく加藤洞源の「討伐作戦」参加もこの時期のことである。「理蕃事業」に関してその中心的担い手であった総督府警務局の資料は、こう述べている¹²。

「(同事業は) 彼等の蒙を啓き蕃地の利源を開発し、一視同仁の聖徳に浴せしむることを目的とするものなれば、誠意帰服する者は容れて化育し、凶悪固陋度し難い者に対しては飽く迄威力を示して帰服を促すにある。計画愈々成り歩武を進むるや、先ず獍猛を以て誇る北方部族に大いに強圧を加へ、遂に彼等の有する銃器弾薬の大部分を押収し、大正三年八月略一段落を遂げ、同十月更に余力を以て南方部族の処置に着手し、多数の銃器弾薬を押収し、大正四年一月に至って投誠帰順をせしむることを得た。茲に於て多大の国帑と尊ぶべき幾多の犠牲を払った五箇年計画理蕃事業も全く完成するに至った。」

また研究者による同事業の歴史的位位置づけについては、近藤正己による簡にして要を得た次のような指摘がある¹³。

「総督佐久間左馬太が行った1910年から五カ年にわたる「北蕃」の「討伐」とその直後の「理蕃事業ノ成功」宣言と「撫綏」方針の表明は、まさしく「威シテ而ル後撫スル」方針を踏襲したものであった。

佐久間の「討伐」は一般に次のような順序で実施された。まず官庁の命令に対する絶対遵守、隘勇線という防御ライン内への進入禁止などを内容とした帰順勧告が出される。帰順勧告に従わない場合には隘勇線で塩や銃の流入を防ぎながら、この隘勇線を徐々に前進させ、再び山嶺を開いて、道路を設けて数十間の草木を刈って射界とし、要所には火砲を配置した堡壘を築造していった。そして近代的兵器を装備した軍隊や警察隊を投入し、先住民がそれに抗しきれず帰順すると、抵抗手段であった銃器が押収された。一九一五年の押収量は一万四〇〇〇丁にもものぼっているが、銃器は狩猟生活に不可欠な道具だったのでその押収は困難を極めた。しかも、佐久間の「討伐」で台湾全土の「征服」が完了したのではなかった。「理蕃史上最後の未帰順蕃」として有名な高雄州旗山郡のブヌン旗タマホ社の二〇〇名余りが頭目ラホアレを先頭に下山し州庁玄関で帰順式を挙げたのは、一九三三年四月二二日だった〔霧社事件は1930年10月〕。佐久間の「討伐」から約二〇年かかったのである。」

なお「生蕃討伐作戦」を考える場合、沖縄との関わりも無視できない。沖縄と台湾との地理的、風土的近縁性に起因し、「領台」直後から少なからぬ数の沖縄県人がさまざまな形で渡台した。内地との関係では被害者である沖縄県人が植民地台湾との関係ではしばしば加害者となった両面性に着目する沖縄在住の史家、又吉盛清は沖縄側史料を実証的に跡付け、沖縄県人の「理蕃事業」への関わりの実態を明らかにしている。その一例として又吉は、「領台」直後の1896年3月、警察官として渡台した仲本政叙の

足跡を追っている¹⁴。「理蕃事業」実施の前年警部に昇格した仲本は、1912年（明治45）年4月、南投庁下の埔里社から発進した「大討伐隊」（石橋南投庁長を前進隊長に一千余名からなる）の幹部の一人として百名の部下を引率行軍中、「生蕃」との銃撃戦で35名の隊員とともに戦死する。

『台湾大年表』をひもとくと同年5月3日の項に「前進隊副長戦死 白狗前進隊副長官長倉警部及び隊長仲本警部戦死す」との記事がみられる。生前の仲本は、「生蕃の巢窟」視された南投庁の集々支庁地区で「討伐隊」を組織し「抜群の功績」でたびたび「勲章」を授けられていた。『琉球新報』（1912年5月18日）は、仲本政叙のようなこうした沖縄県人について「（県人巡查で）土匪、又は蕃人討伐に従事し勲勞あるものに対し、叙勲及賜金の御沙汰あり」と報じ、15名の関係者の氏名を公表した。植民地台湾が東南アジアあるいは南洋群島への「南進」の拠点とされる一方、「内国植民地」沖縄は、台湾およびそれ以南への「南進」の「前進基地」として位置づける見方が19世紀末以降根強くみられたが、植民地において一定の地位と「名誉」を手にした仲本警部の生涯は、内地と外地の間に置かれた沖縄人の複雑な立場とそれ故に派生する屈折にみちた台湾との関わりの象徴といえるのだろう。

台湾歩兵第一連隊の兵士として加藤洞源が「生蕃討伐」に従軍したのは、日本側にも少なからぬ死傷者が続出していた1912（大正元）年からの約2年であった。「理蕃事業」実施の背景および加藤の従軍時の状況をみる一助として、『台湾大年表』に依りつつ「理蕃事業」五箇年計画が開始された1910（明治43）年以降、約5年間の「理蕃」をめぐる全事項を記しておく¹⁵。「武」と「撫」を織り交ぜた施策が試みられている実情がうかがわれるが、なによりも先住民による熾烈な抵抗が、日本側の死傷者数の多さからも明白に浮かび上がってくる。また日本側が1914年8月と9月、各地で「凱旋祝賀会」を盛会裡に開いた直後に「兇蕃」の襲撃により多数の死傷者が出たとの記述も印象的である¹⁶。

「理蕃」関係略年譜

明治43(1910)年

1月

総督蕃人引見 佐久間総督は台北観光中のガオガン蕃人を官邸に引見す（8日）

蕃地部設置 愛国婦人会台湾支部に蕃地部を新設し蕃地の開拓並に蕃産物を経営す（16日）

兇蕃駐在所襲撃 ガオガン蕃人宜蘭叭哩沙支庁九芎湖駐在所を襲撃し巡查堀川忠五郎外十一名の死傷者を出す（29日）

2月

総督隘勇線巡視 佐久間総督は北部隘勇線巡視を終り帰府す（20日）

5月

宜蘭隘勇線進隊 行動を開始す（21日）

6月

宜蘭討蕃隊苦戦 宜蘭方面討蕃隊は9日以来激戦数十回ボンボン山の夜襲激烈を極め川和田大尉以下70余名の死傷者を出す（21日）

討蕃隊員慰問金品を募集す

